

心揺さぶられる × 興味の種

社会福祉法人喜慈会 子中保育園 神奈川県

子どもも大人も安心して試行錯誤できる環境づくりを目指して

ここが
Point!

全職員で「科学する心」とは何かとことん話し合い、「子どもたちが心揺さぶられた瞬間を逃さず、興味の種をはぐくむ」という実践全体のイメージを創出しています。このイメージの素晴らしい点は、年齢を問わず、大切にしたい子どもと保育者の姿を表していることです。複雑なやりとりを伴った年長児の脱炭素に対する探究でも、ふとオーガンジーに手を伸ばす0歳児の日常の探究でも、先生方は「心揺さぶられる」瞬間を捉え、「興味の種」を「芽」へと育てようとしていました。園全体で根本となる考え方、育ちのビジョンを共有することは、子どもも大人も安心して試行錯誤に没頭し、ゆとりをもって育ち合っていくことができる環境づくりへとつながります。

天井から吊るされた色とりどりのオーガンジー。風に揺れたその瞬間、0歳児の「科学する心」も動き出す。手が届く位置にあることで、背を反らせ引き寄せる子。自ら環境に働きかけていく子どもたちの姿を丁寧に記述に残しています。

課題を整理し図示した「科学する心」

マップ作成による考えの共有 (5月31日)

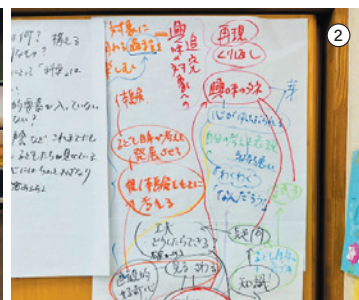
職員会議において「科学する心とは何か」という問いに対し、写真(①)のように個々の意見を可視化、共有しながら話し合いを進め、写真(②)のようなマップを作成した。(A)「興味の対象への探究」「対象に関わる過程を楽しむこと」「興味の種」などのような「科学する心」の概念的な言い換えに相当する考えや、(B)「考える」「確かめる」「比べる」「疑問を持つ」「繰り返し試す」といった保育者が観察可能な子どもたちの具体的な言動、(C)「なんだろう?という好奇心」「ポジティブな好奇心だけでなく『気持ち悪い』『なんか変だ』という一見ネガティブでも『心揺さぶられる』『コトや体験』のように子どもたちの様子から想像できる心情や情動にあたる言葉が各保育者から挙がった。

0歳児の「科学する心」では(C)の「心揺さぶられる」状態を捉えることがとくに重要であり、「見る」「触る」などの動作を「直感的な好奇心」と表現する考え

も挙がった。「興味の種」と「心揺さぶられること」という言葉に共感したためか、複数の保育者も自分の考えを述べる際、繰り返しこの表現を使った。そこで、今年度の子中保育園の「科学する心」として、「興味の種」と「心揺さぶられること」の前提や要件を共有するために、再度話し合いを行うことにした。

『科学する心=心揺さぶられること×興味の種』で、どの子にもある (6月18日)

「興味の種」と発言した保育者から『「種」は、保育者から見て『興味があるのかな』と思える言葉や表情、態度に現れる、子ども自身の小さな気づき』という説明があった。『「種」でなく『芽』でなければ保育者が気づけないのではないだろうか』といった深掘りに対して『「芽」は興味に向かって子どもたちが実際に示すアクション。保育者が働きかけたり、環境構成を整えたりしても、子どもが行動しなければ『種』で終わってしまう』『「種」を『芽』にするためにも子どもたちが安心してチャレンジできる環境が重要』といった、「科学する心」を育てる環境づくりについても意見が出た。育てる環境について、「子どもに対して働きかけすぎない、言い過ぎない、正解を言わない」と「子どもの気づきや発見に反応する」のような、一見、逆のことを言っているような意見も出たが、この二つの考えは、子どもとの「対話デザイン」という観点で共通しており、子どもの声(表情、態度も含めて)を聴いたうえでの反応が重要であることを指摘している。話し合いは、「すべての子どもに『科



学する心』はあるが、表現、発信が分かりやすい子、分かりにくい子の違いがある。分かりにくくても拾おうとするのが保育者の役目」「好奇心が無さそうに見える子もいるが、だから『無い』とは言えない。子ども自身が

本当に安心できる環境では出せる」などの『『科学する心』観』にも広がった。

5月31日の話し合いと、6月18日の話し合いをもとに子中保育園の「科学する心」を図示した。

子中保育園の「科学する心 2024」

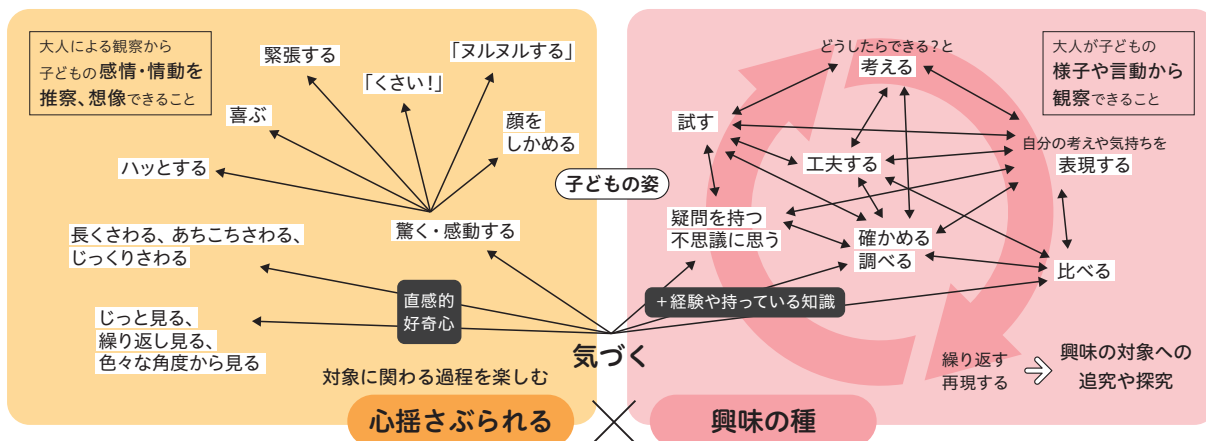
科学する心を育てる環境

- 豊かな体験をつくる環境
- 様々な人たちと関わる環境
- 異年齢保育

- 安心できる環境・子どもがチャレンジできる環境

大人が言葉をかけすぎない

子どもの好奇心に反応する



心揺さぶられる“出会い”オーガンジーに手を伸ばす

0歳児 / 5月

5月上旬、0A（6カ月）が、寝返りをしたり、床に寝転がって遊んでいた。保育者が色とりどりのオーガンジーを天井から吊るし、扇風機の風で揺らすと、モビールのようになって楽しむ。当時はオーガンジーを下から眺め、風で揺れる様子に手足をバタバタしながら笑顔で楽しんでいた。その頃は遠くに見えていたオーガンジーが、バウンサーに乗ると0Aにも手が届きそうになった。0Aはまたオーガンジーに“出会った”。揺れる色とりどりのオーガンジーに、好奇心いっぱいの表情で

手を伸ばす（①）。オーガンジーを自分に引き寄せるために体を持ち上げるように反らせ、しっかり掴もうと腕を曲げる（②）。黄色のオーガンジーを掴むことができた。オーガンジーを掴んだまま、体をバウンサーに戻して、嬉しさや喜びや満足を満面の笑顔で保育者に視線を合わせて伝える（③）。その後、オレンジ色も掴み、掴んで動かすことによって揺れることに気づくと、動かして揺らすことに集中する。





OB（6か月）が寝返りで移動できるようになったので、OBが触れる位置にオーガンジーを吊るす。OBはオーガンジーが手の届く場所にあることに気づく(①)。近くで触れるように、保育者の膝の上に座ると、手を伸ばして触れた。吊るした元の部分をじっと見つめる(②)。大きく腕を横に伸ばし、オーガンジーの動く様子を見続ける(③)。オーガンジーの端を掴んで引っ張るが、視線は吊るした元の部分を向いている(④)。何度か引っ張ると取れた。取れた赤のオーガンジーではなく、次はオレンジ色に興味が移る。オレンジ色のオーガンジーでは端をつまみ(⑤)、つまんだ指を動かしながら(⑥) オーガンジーの動きを見つめる。しばらく、指を動かした後、手を広

げて手のひらを上に向け、オーガンジーの端を撫でるように触る(⑦)。人が大好きなOBはカメラを向けると、そちらを見ることが多いが、このときはオーガンジーから目を離さなかった。

考察

0歳児の心の揺れは、表情、体の細かな動きの変化によるサインに現れる。保育者はサインを読み取り、予想して動く。動いた結果に対する0歳児の反応から、適切なかわり方（アイコンタクト、状況の言語化、受容的言葉かけ、見守り等）が判断できる。0歳児の「科学する心」に気づき育てるには、それを繰り返していくことが重要だと考える。

「科学する心」を感じた 小さなつぶやき



5歳児

石が月みたいに
見えるってことは、
月は砂で
できているのかな

お迎え時、5歳児が父に園のハンディ顕微鏡で石ころを見せたところ、父が「月みたい」と言った時の反応。証拠に基づく推論をしていて、大人顔負けの思考法だと驚きました。

実践の背景や全体像、
園の先生による事例分析や考察は
論文をお読みください。

